放送大学研究年報　第40号（2022）79-91頁
Journal of The Open University of Japan, No. 40（2022）pp. 79-91

社会時間とは何か
―他者との共時化による近代の時間構成―

坂　井　素　思[1)]

What is Social Time?
―Modern times configuration through synchronized effects with others―

Motoshi SAKAI

要　旨

このエッセイ（試論）では、「社会時間とは何か」について追究している。重要なことは、この社会時間が、他者や人びとの間の「共時化」作用によって成立している点である。なぜ共時化が重要であるかといえば、社会時間の構成においては、時間を合わせる相手が誰であるのかが決定的な意味を持つからである。誰の時間を準拠として定め、それに合わせるのか、どのような範囲で共時化作用が行われるのか、という他者との関係性が、社会時間を形作っている。

「誰に合わせるか」の事例として、近代社会では三つの時間構成スタイルがある。第１に、「時間構成する側」が主導してこれに時間を合わせる方式で、１者関係（支配型共時化作用）の社会時間構成がある。近代社会では、工場や企業や官僚組織などの発達によって、他者や事物を従属させる社会時間が発展した。第２に、「時間構成される側」にも時間を合わせる相互的な方式による、２者関係（交換型共時化作用）の社会時間構成がみられる。近代では、市場取引や貸借関係などで、社会時間を共有することが行われるようになった。第３に、「時間構成する側とされる側」を全体的に媒介するなかで時間合わせが行われる方式で、３者関係（互酬型共時化作用）の社会時間構成が行われる場合が見られる。祝祭や世代などで醸成される混沌状態のなかにあっても、構造的な時間構成が形成されるのをみた。

社会時間では、このように誰が主導するかによって、心理時間や身体時間や物理時間との調整と組み合わせが行われるかが決まってくるような、他者との複合的な時間構成が行われている。そして、最終的には、心理や身体などへの社会時間の浸透によって、逆に時間が社会を秩序づける実体化作用が生じていることを見ることになる。社会時間は、カーニバルの時間効果でみるように潜在化したり顕在化したりして、また実体から非実体の間で局面を変えながら、螺旋状に転回し、混沌の中にも一定の構造を構成する時間として、魅力的な時間構成を示し続けている。

ABSTRACT

This exploratory essay pursues the question of what social time is. The important point is that this social time is established by the synchronized effects with others. In the configurations of social time, it is important to determine whose time is to be conformed to and to what extent the synchronized effects is carried out.

Three styles of time configurations are found to be examples of 'whose time to conform to'. Firstly, there is the social time configuration of unilateral relations (dominant-type synchronized effects), in which the 'time-configurating side' takes the initiative and adjusts the time to it. In modern societies, the development of factories, enterprises and bureaucratic organizations has led to the development of social time in which others and things are subordinated. Secondly, there is a social time configuration of bilateral relations (exchange-type synchronized effects), which is a reciprocal way of adjusting time to the 'time-configurated side' as well. In modern societies, social time was shared through market transactions and loan relationships. Thirdly, there are cases of social time-sharing in the form of trilateral relations (reciprocal-type synchronized effects), in which time is shared through the overall mediation of the 'time-configurating and the time-configurated'. Even in the chaotic conditions fostered by carnivals, generations,

[1)] 放送大学特任教授（「社会と産業」コース）

etc., we have seen structural time configurations being formed.

In social time, there are complex time configurations such that the coordination and combination of psychological time, physical time and physical time is determined by who is in charge. And finally, the penetration of social time into the psyche and the body results in the substantiating effect of time ordering society in reverse. As seen in the carnival effect, social time continues to be a fascinating time, as time that is latent and manifest, and as time that changes phases between entities and non-entities, turning in a spiral, and constituting a certain structure in the midst of chaos.

1. 社会時間と近代時間―なぜ人びとは時間的に同時存在するのか

社会では、時間は他者を通じて現れるという、集団特有の時間事象が形成される。時間と社会の関わりは、個人が感覚的に認識するというよりは、社会時間というものを通じて、人と人との関係性として立ち現れると考えられるが、この「社会時間」とはいったい何だろうか。これまで従来の時間論で捉えられてきた自然時間や文化時間、心理時間や生理時間などに対して、社会時間はどのような特質を持っているのだろうか。

一例を挙げるならば、社会学者デュルケームによって説かれた「社会時間（social time）」のひとつの考え方がある[1]。彼の晩年の著書『宗教生活の原初形態』において、社会時間とは「集団が持つ共通の時間」のことであると考えられており、個人のみが認識する時間ではなく、儀式や慣習の中で見られるような、集団が形成する時間について考察されている。

このように、複数の人びとが共有（share）したり分有（participate）したりする共通の時間として、社会時間は起こってきている。人びとは同時に存在したり、同時存在するために時間合わせしたりするのだが、なぜこのような社会時間という時間を構成するのだろうか。他者との間のどのような関係が社会時間というものを生み出すことになるのだろうか。

わたしたちの身の回りで具体的に見てみよう。たとえば、喫茶店で友人と会話を楽しむときには、「時間を共有する」とわたしたちは表現する。AさんとBさんが集まって、ある一定の時間を一緒に過ごして、そしてまた別れていく[2]。また、家族で共に食事をしたりピクニックに行ったりという時間でも「時間を共有」する[3]。

個々の時と時の間隔のなかで「社会時間」が現れ「共有される」といえる。人間という文字に、間という文字が入って、人と人の間が重要であるといえるように、「時間」という文字にも間が入っていて、時と時の間が重要であることを示している[5]。音楽会や読書会、さらには結婚式や成人式や入学・卒業式などの儀式や慣習で一緒に過ごす時間はとくに重要である。みんな一緒に、つまり集合的に共通の間を埋め、人びとや事物の間の時間的な配列を整えることが観察される。デュルケームによって「社会時間」とよばれることになった。

時間の表現に関しては、音楽のリズムやテンポなどによって比喩的に語られる場合が多い。たとえば現象学のフッサールは『内的時間意識の現象学』のなかで、音楽の比喩を使っている[6]。彼を直接引用するわけではないが、この例に倣っていえば、時間を進める「リズム」と並んで、音をつなぐ「メロディ」や、音を重ねる「ハーモニー」のようなものとして、社会時間があるといって良いだろう。音と音をつなぐのがメロディであるならば、自分の時間と他者の時間をつなぐのが社会時間であるし、音同士の「和音」を作ったり混声させたりするハーモニーに相当するものとして、人びとの間にあって重層的に存在する社会時間があるといえる。個人はそれぞれ異なる時間を持つが、みんな合わさって、一つの集団の時間を作り出すのである。経済社会学者グラノヴェターが言うように、社会では、人びとの関係は時間的に埋め込まれているのである（temporal embeddedness）。

よく指摘されるのは、近代時間という「現代」の社会時間の在り方である。近代時間はどのようなところで発達したのだろうか。近代では、産業革命が起こり、科学技術が社会を変えていった全世界的な時代が

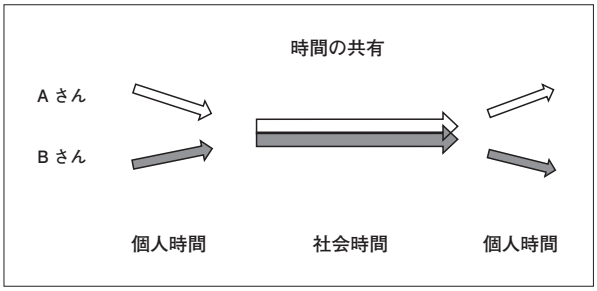

図1 「時間の共有」とは？[4]

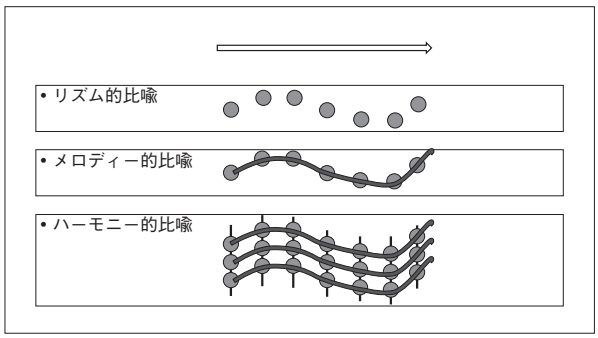

図2 社会時間の音楽的比喩

あった。科学技術が工場に取り入れられ、大規模な企業組織の時間を形成した[7]。人やモノが集まるような工場、企業、公共団体、市場などの組織を大規模に発達させたところに、近代特有の時間のあり方が現出した。これらの組織では、人びとが時間を共有した。近代になって産業（industry）や労働（labor）などの人間同士の人為的・協働的な営みが増加したために、近代時間という特徴ある社会時間がみられるようになった[8]。

近代時間の中でも、典型例は工場制度における「産業時間」である。たとえば、英国でアークライトの水力紡績機工場が18世紀にできるが、ここでは女性や年少労働者が300人規模で集められるような施設が産業時間を作り出していくことになる[9]。時間文献としては、産業革命以来の産業時間を描いた文献が数多く残されている。なかでも典型例として、タマラ・ハレーブン『家族時間と産業時間』を挙げることができる。20世紀初頭の米国マンチェスター市にあった、世界最大の繊維工場アモスケグ社を描いている。人びとが集まって生産するようになった工場制度で、近代時間的な「時間の共有」が生じた。産業の下での特有の集合時間を作ったことによる、このような産業時間というものの成立があったことが大きかったといえる。産業時間では、人びとが同時に集まる、あるいは時間合わせをしてタイミングを図る必要があるために、時計技術の発達がとくに重要だった。そこでは、産業時間における時間厳守（punctuality）のルールが、近代時間の典型的な習慣の一つとなった[10]。『家族時間と産業時間』の口絵写真の中に、鐘楼が見える。ここには鐘と大時計が取り付けられており、出社時間と退社時間には、この門の前に労働者たちが集まり、始業と終業の合図で、一斉に産業時間、そして家族時間へ入っていった。このように、近代時間の典型例として、工場制度における大規模施設での、労働によるタイムバインド（時間束縛）が見られるようになった。

近代においては、家族時間も変わり、産業時間に合わせた家族時間が成立することになった。家族時間から出て、工場や事務所などの大規模施設での労働時間が現れた。それは、たとえばA・スミス『国富論』によって指摘された有名な工場内「分業（division of labor）」という事例を考えれば理解できる[11]。製品加工のプロセスで、工程間の時間一致は生産性を高める工場では決定的に重要となっている。A・スミスの分業論が指摘し、マス・プロダクション方式を取り入れたフォードの自動車産業の流れ作業、さらにジャスト・イン・タイム体制のトヨタへ受け継がれていくような、労働の分業体制で行われるようになったといえる[12]。分業体制では、人と人を結び、タイミングを合わせ、時間合わせの調整を行う必要があった。時間の結合が存在しないと分業は成立しないので、工場で時間を共有する必要性があった。ディドロとダランベールの『百科全書』で18世紀のピン製造の初期の工場内分業が描かれているが、針金からピンが作られている。ここで、一人が欠けても、仕事がストップしてしまう産業時間のあり方がわかる[13]。

社会というものの時間構成が自然中心の社会から、人間中心の社会への転換が生じた。それは、自然のなかで営まれてきた家族生活や地域生活という経済社会が、国家や市場が主導する近代の経済社会へ転換したことを示している。この「モダンタイムズ（現代）」の具体的な有様は、チャップリンの映画『モダンタイムス』やルネ・クレールの映画『自由を我らに』などで、ベルトコンベアや歯車、そして工場や監獄での監視者の存在などで、人びとの社会時間の同時性が描かれてきている。

この点において、自然時間と社会時間とを比べてみると、社会時間の特徴がよくわかるだろう。近代にあって、人びとの人為性が増し、文化人類学者レヴィ＝ストロースのいう、いわば「冷たい社会」から「熱い社会」へ時間的転回が行われたという性質をみることができる[14]。

2. 時間の同時性と共時化

人びとは他者と異時的に生きていると考えているが、他方で産業時間、家族時間、余暇時間などの社会時間の中では、他者との「同時存在」現象が立ち現れる。このような社会時間の典型として「近代時間」という時間の在り方が観察される。社会時間の多くでは、集団の共有する「近代時間」のような同時代性という時間的性質を持っている。近代人は時間を構成したり、あるいは後で見るように、逆に近代生活は時間に構成されたりするので、何か確かな共通の準拠枠や絶対的な尺度によって測られる時間が存在するというよりは、むしろ人びとの間に起こる不確実な偶然が組織化されて、再帰的にみて、必然的で同時的な社会時間が立ち上がってくることがわかる[15]。このような時間として、近代時間は存在する。ここでは、近代人たちの間に現れる同時性・同時代性などの「時間の共時化現象」に注目したい。

とりわけ、近代時間が示してきた同時代性には、きわめて特徴的な時間の関係が刻まれてきている。近代（現代）は、モダンタイムズ（modern times）と記されるように、時間の複数・集積としての時代（times）を表し、その内容には過去・現在・将来などを含む社会の時勢や時風などが含有されると同時に、前後を指示する同時代特有の循環的時間を示している[16]。

どのような時間が近代には流れ、そして堆積されてきたのだろうか。このような社会時間が構成される方式には、持続や継起などの変化を及ぼすものに関する記述が多く残されてきた社会の歴史がある。伝記や歴史書のように、クロニクルに観察される社会的記述が社会時間では多い。歴史の瞬間は一過性の特別なもので、不可逆的で特殊な性質を持っており、絶えず変化するものと考えられている。つまり時間の「異時性」という性質が多く認識されるが、けれども、それと同

等に認められる時間構成の方式に「同時性」がある。人間の営み・出来事（イベント）にとどまらず、周りの事象つまりは環境も含んで、人びとが同時に存在する性質を社会時間は示している[17]。

他者と自分との関係の時間が問題になるということである。近代時間では単に集団全体の塊が大きくなるというだけではなく、他者と自分との間に同時的な時間構成が生ずるということである。時間の経験的な作用には、出来事が持続したり継起したりすることが知られている。これらと並んで、私たちが時間として経験するのが、同時性（simultaneity）や共時性（synchronization）という時間の特性である[18]。

このような時間の同時性や共時性に注目した論者は数多くいるが、とくに注目できるのは哲学者カントや社会学者ムーアである。この同時性をもたらすのは、近代社会にあっては時間作用のなかでもとくに人や事物のあいだの「同時存在」や「共時化」によるものであるとする考え方がある。個人の時間の中では、目の前に展開される事象が同時に起こる現象をもたらす作用があるし、集団や社会のなかでは、人びとのあいだに、つまり異なる個人間で同時に物事を認識する作用がある。

この「同時性（同時存在）」という時間の性質は、社会の中の時間のあり方を考える上できわめて重要である。同時性についてもっとも敏感に認識した時間論者のひとりとして、上述の哲学者カントがいる[19]。「同時存在とは、多様なものが同一の時間のうちで現実存在することである」と指摘し、さらに「さまざまな対象は、同時に存在しながら結合されて表象されねばならないかぎりで、その位置を時間のなかで交互に規定しあって、そのことをとおして、一個の全体をかたちづくらざるをえないのである」と、経験的な時間構成における同時性を指摘している。同時性は、交互的にAがBに対してある時点でその位置を規定し、逆にBがAに対して位置を規定する作用、つまり相互作用によって成されるのである。この相互性がなければ、同時存在はありえないとするのだ。この相互性があるために、互いには外的でありながら、結合されるものとして、社会という事象が同時存在するのである。

この同時性を社会の中でもたらす作用として、「共時化」という集団の行為が重要な役割を果たしている。社会学者ムーアによれば、共時化とは「物事を同時にすること」であると考えられている[20]。しかし、これだけでは、同時性と変わらない。共時化には、同時性に伴って、さらに波及効果が人為的に加わるのだと言っており、共時化する必要があるのは、個人時間の間には「時間のずれ」が存在するからであるとする[21]。共時化することによって、つまり鐘やベルなどの記号や象徴などの合図を利用して、人びとの間での時間調整や、周辺の社会的行為の合致が生ずると主張する[22]。そのために、共時化作用には社会的制度などによるコントロールが必要であり、これによって社会的行為間の適切なタイミング（時間合わせ）が図られると考えた。

いづれにしても、同時とか共時とかということについては、他者との関係、事物との関係などのような、自己にとっては周辺な状況に、時間的状況が依存していることになる。誰との間で、そしてどのような時間の範囲で、同時や共時が成立するのかが問題である。ここでは、瞬間的な同時性と持続的な同時性とがあり、社会にとっての同時性は必ずしも瞬間的ではなく、社会的に一定期間のなかで見られる同時性ということである。結局、人びとがどのような時間範囲で、誰の時間に合わせて、人びとの間の時間構成を考えるかということである。

もっともそうなると、「同時」という現象の解釈に違いが出てくることになる。厳密に考える物理時間や、感性に重きを置く心理時間などと比べて、社会時間の同時性とにはどのような違いがあるのだろうか。

同時性でよく出されるエピソードがある。夜空の星を眺めていて、自分の周りの景色と、この星の光とは同時存在といえるだろうかという話だ。よく知られているように、星の光は「何億光年」の距離を辿って地球に届く。したがって、今見ている光は、じつは何億年前の光だということになる。ところが、周りの景色は、今この目でみている。たとえ、同じ人の目に写っていても、それは同時とはいえないことになる[23]。もちろん、物理時間としてみればたしかにそうかもしれないが、視覚としては、周りの景色と星の光は同時に同じ目に写っているから、心理的には画像イメージとして「同時」だと人びとは考えるという事実は残るだろう。

社会時間では、同時刻という瞬間の同時性から、同期間、同年代、同世代、同時代などの持続する同時性まで、すべてが同時の意味に使われている。つまり、同時には、かなりの幅があると考えられている[24]。社会時間は直接見たり聞いたり触ったりできないために、何かを通じて、わたしたちは認識している。天体や機械時計をみたり、体内時計を感じたり、心理に従ったりするわけだが、それは最終的には、社会の中の他者との相対関係によって、時間を経験的に認識する場合が多いといえる。

このような経験的な同時性の範囲において、近代時間の中では、おおよそ３つの時間合わせ、つまり共時化の方法が発達してきている。とくに近代社会では科学技術の変化、組織の大規模化にしたがって、社会のエントロピー増大と同様に、次第に人間関係の規模が拡大していく傾向を見せている[25]。後で見ていくように、第一に技術的で強制を手段とする方法であり、「時はチカラなり」という言葉によく現れている。ひとりが、対象とする相手あるいは対象物との関係で時間を構成する方法、これを一者関係と呼んでおきたい。第二に互いの合意による方法であり、典型的に「時はカネなり」という言葉に現れている。つまり、二人が互いに関係し合う時間を構成する関係であり、二者関係を見せることになる。そして第三に３人以上

の関係が現れるような三者関係、つまり構造的な時間を構成することになる[26]。

3.「時はチカラなり（Time is power）」の時間構成

第１に挙げることができるのは、AがBに対して、強制的あるいは支配的な手段を用いて、同時に時間を合わせる方法である[27]。直ちに思い浮かべることができるのは、時間が権力や支配の道具として、使われてきた歴史である。支配型の共時化作用である。さきほど挙げたチャップリンの映画「モダンタイムス」が典型例である。権力を持っている社長がいて、現場監督の命令で、工場全体の労働者が歯車のように働いている。社長の権力が人びとを共時化させているといえる。

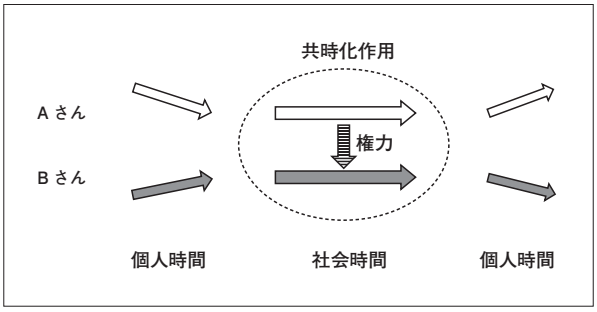

図３　支配型共時化作用

ムーアの定義にしたがって表現すれば、「権力」を合図として用いて、人びとの行為が合致されていることになる。企業組織での共時化が典型例だが、わたしたちの日常でも、時間がチカラとして現れてくる具体的なものがある。たとえばジャック・アタリ『時間の歴史』が指摘するような、時間の現れ方としての「カレンダー」つまり「暦」の発生がある[28]。このカレンダー（calendar）の語幹であるカレの語源には、「告知する」「叫ぶ」などの合図の意味が含まれているとする[29]。カレンダーが示すのは、日付であり、時刻なのだが、その日付に支配のための儀礼などの人びとの集合を表す記号が付け加えられるようになったのである。カレンダーの示す暦に合わせて、たとえば人びとの農耕が行われ、供儀や儀式が行われたとする『ベリー公のいとも美しき時禱書』などの時禱書（Book of Hours）も作られるようになっていく。支配層はこのようなさまざまな種類のカレンダーを利用して、人びとの間の社会秩序を作り出そうとした歴史がみられる。時間は社会あるいは集団に対して支配秩序を与える道具として使われてきたといえる。「時間は権力技術の模倣であり」、社会秩序の「告知者」として働いてきたのである[30]。これが最終的にはカレンダーという日常習慣に定着したのである。このように、時間の技術的・手段的な利用は古代から続いてきたが、さらに近代になって、時計技術の進展のために、時間を使う権力の統治目的の社会秩序への影響を与えたといえる。

ここで重要な点は、なぜ「時間はチカラなり」という時間の共時化が近代社会に現れたのかという、その理由である。近代時間という観点に注目するならば、３つの点に注目できる。第１には技術、とりわけ時計技術が進んで、「機械時間」が支配するようになったこと。第２に労働者の組織化が進んで、労働者の「身体時間」にまで社会時間が進入するようになったこと。第３に、人びとが工場や公共制度の発達によって、大規模な集合が必要になり、「産業時間」が成立したことなどが挙げらる。

第１の理由から詳しく見ていきたい。なぜ時計技術の発達が権力による時間構成を生んだのだろうか。背景には、水時計や日時計からゼンマイ時計や振り子時計そしてクオーツ時計などの計時法の発達があり、この中で時計の社会的意味が出現したことが大きかったといえる[31]。最初は、村にあった鐘と同じイメージとして、大時計をみんなが見ることで、村の秩序が保たれると同じような時計の支配的な時間秩序があった。昔の工場にはかならず大時計や大きなベルが設置されていた。先ほど述べたハレーブン著『家族時間と産業時間』に出てくる工場の門に付けられた時計と鐘楼は典型例である[32]。これに合わせて、人びとが労働し、大量生産が可能になった。つまり、大時計が産業時間を創出したといえる。

ところが、腕時計が出てくることになる[33]。これはパーソナルな利用なので、集団利用ではないことになる。それで、余暇時間の気晴らし・休息・自由時間・無為時間などのプライベートな使用に、腕時計が使われたかというと、もちろんそれもあるが、実際には腕時計はむしろ産業時間のなかで活躍した。時間がパーソナルになったことで、むしろかえって、どこにいても人びとの同時性が確保され、共時化が行われやすくなったとさえいえる。目覚まし時計がどのように働いているかを想像すればわかることである。目覚まし時計は、ベッド横などのきわめてプライベイトな場所で使われているのだが、刻まれている時間は機械時間であり、社会時間に支配された時間なのである。

なぜ人びとはそのような支配に従ったのだろうか。第２の理由として、教育訓練によって、社会時間が労働者の体内時間である「身体時間」に入り込んだという認識が重要である。

近代に建てられてきた施設管理では、必ずタイム・スケジュール（時刻表：time schedule）が作成された。大規模な工場施設・学校施設・病院施設だけでなく、小規模な事務所や工房でも、従業員の勤務時間は、時間管理を受けていた。朝と夕方の出勤・退社時間を印字するタイム・カードは典型例である[34]。近代社会に成立してきた民間や公共の制度の多くでは、施設としての空間をもっていたが、その施設自体が集団を同時に動かす必要に迫られていた。このために、こ

のような施設では、時間の同時性が求められたのである。開所時間と閉所時間が人間関係を結びつけるドラマを生み出してきたのである[35]。

じつは、施設の空間における同時性は、勤務時間や学習時間などのタイム・ライン（time line）を生み出すばかりでなく、ついには個人の身体内部にまで時間が侵入する契機を生み出すことになったといえる。時間が集団へ働きかけるだけでなく、個人の身体時間への影響力を持っていることが指摘されている。じつはこの点こそ、時間がチカラを持つことになる要諦なのだ。もし個人の外部で、単に客観的と考えられている時間が過ぎていくのであれば、個人に対する影響の度合いは少ないはずなのだが、実際にはむしろ逆であり、時間への抵抗を生むに至るほどの近代的な時間構成の複合が行われることになる[36]。

精神分析のミシェル・フーコーは、いわゆる「監視社会」を描いた。監視されることで、規律・訓練が進み、結果として個人の身体時間の中に、社会時間が浸透することを指摘した。フーコーは、権力支配の対象あるいは標的として、身体が問題であると考えた。彼が適切に指摘しているように、「身体は権力の対象ならびに標的として完全に発見されたのであった」[37]。

馬術用語のドレッサージュ（調教）という言葉に相当する事情がある。あたかも馬を調教するが如くに、労働者を教育訓練して、身体内に産業時間を浸透させることが行われたのである。重要なのは、これが時間関係として現れる点である。支配のための時間管理が身体時間を管理するものとして導入されたことになる。企業が行う規律・訓練（discipline）は、まさに社会時間が人びとの身体時間をドレッサージュする過程としてはたらくことになったのである[38]。

ここで社会が個人の身体を触発し整序するシステムとしてはたらくのが、「監視」である。英国の功利主義者J・ベンサムが指摘して有名になった、パノプティコン（一望監視施設）の監獄を思い浮かべれば良いだろう[39]。ひとりの監視人が多数の受刑者を監視することができる効率的な監視社会が構想されたことになる。本来、身体時間は個人の内的な時間のあり方であり、生理的・生物的などの身の回りの時間が支配しているために、個々人が異なる時間を営んでいる。これらの時間を合わせるためには、外的な強制力だけでなく、内的な強い強制力が必要であると考えられることになったのである。G・オーウェルの小説『1984』に見られるビッグ・ブラザーのように、身体内部までに入り込んで、監視の目を意識させるところまで、時間が作用することになる[40]。したがって、この社会時間が身体時間を監視することは、時間がシステム全体を統御することになる。フーコーの言い方を借りると「監視は生産装置における内的部品であると同時に規律・訓練的な権力における特定の歯車である[41]」ということになる。

監視のプロセスは、組織構成においては加速度的に生ずると考えられる。少人数の組織では、監視は緩い。けれども、人数が増えるに従って、監視は強くなり、専門の監視員が常駐することになる。そして、いずれはそれも監視が行き届かない場合には、身体内部への規律・訓練のシステムが開発され、監視と併用されることになる。社会時間では、身体レベルと社会レベルとにおいて、複合的な時間構成が行われることになる。今日では、街中に防犯カメラが設置されていて、日常生活上の共時化は身体レベルから、さらに潜在的な心理レベルにまで影響を及ぼしてきている。

第３に、近代時間の共時化作用において、なぜ人びとの集合が大規模化すると時間合わせが必要となるのだろうかという点が問題となる。最初は、支配型としての時間構成が、労働者を社会時間へ結びつけていると考えられていた。ところが、労働者は家族時間を余裕を持って十分に与えられても、さまざまな理由で、産業時間を最大限受け入れてきている。中には、仕事中毒（ワーカホリック）となって、社会学者のホックシールドがいう「タイムバインド（時間束縛）」状態を自らが受け入れてしまうような、時間構成が産業時間では見られるようになった[42]。必要があって時間を使っていた人びとが、逆に時間に使われるようになるという、時間の実体化現象が起こる場合があるといえる。

４．「時はカネなり（Time is money）」の時間構成

時間構成を操作することで、人びとは同時存在を高め、結果として人びとが共時化（synchronize）される作用のあることをみてきた。前節では、とりわけ時間が権力（power）を通じて、人びとを共時化するのをみてきたのだが、近代社会の時間では、駆動する両輪のもう片方ものとして貨幣（money）がある。近代時間は貨幣をも介して、人びとに時間作用を及ぼしているのを見ることができる。

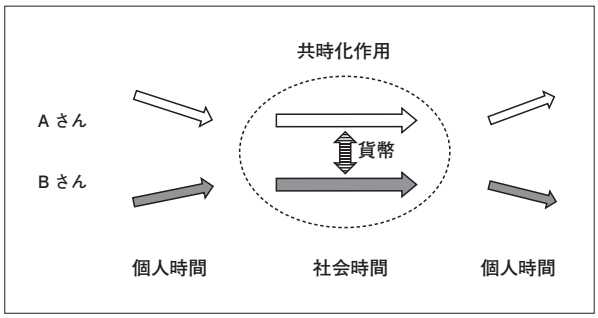

図４　交換型共時化作用

権力の共時化と貨幣の共時化の違いが重要であるが、まずは「時はカネなり」の始まりを確かめたい。この権力と貨幣の及ぼす時間構成の違いに気づいたのが、米国独立当時の実業家で『自伝』の著者として有

名なB・フランクリンである。彼が『若き職人への助言（1748)』で書いたのは、次のとおりの有名な言葉である[43]。「時は金なりということを忘れてはいけない。1日10シリングを稼ぐことができる労働者が、その日の半分を外へ出かけたり怠けていたりし、その娯楽と怠惰の間に6ペンスしか使っていないとしても、それを唯一の出費と考えるべきではない。むしろ5シリングも捨てていることになる」という表現を使っている。半日遊ぶと、何も出費していなくても、働かないで賃金をもらえなかった分だけ損をしているのだと言っている。つまり、いわゆる機会費用がかかっていると考えている。半日を娯楽や怠惰に、自分で費やせば、5シリング捨てることになるが、他者に半日の労働を渡せば、5シリング得ることができるということだ。

フランクリンは「時間」は支配によって政治的に利用する手段としてではなく、取引可能な経済的な資源でもあると考えたのである。ここにチカラとカネの違いが現れる。時間資源は当初、売る側の持ち物であり、売らなければずっと持ち続けることも可能である。ところが、もしこの時間を使わず、ずっと手元に置いて眠らせているのであれば、資源としての価値はゼロどころか、マイナスとなってしまうような資源なのである。時間資源は、いわゆる「機会費用」を負った資源なのである。経済取引、つまり相互行為によって経済価値が生ずる関係なのである。

ここで、フランクリンは、権力による時間構成と、貨幣による時間構成の違いに気がついたのであった。極端な言い方をするならば、権力による時間構成はあらかじめ支配されることを受け入れて、そのうえで上のものが下のものの時間を裁量的に操作しうると考えているのに対して、貨幣による時間構成では、時間は「時間資源」として売り買いされ、双方は対等の立場にいることに気付いたのである。ここでは、自らの利益のために、時間を売り、他者の利益のための時間と結合され、その時に共時化される自発的交換が成立している。ここでは、双方の合意のもとにおいて、この相互交換が人びとの時間を一致させているのである。社会時間の存在は、相互交換によっても認識が可能なのである。

この時間資源についていえば、人と人とを結びつける媒介物として、時間が貨幣と同じような役割を担っていることになる。この点にも、注意が必要である。他者に対して時間を売ることが可能であり、その時点で他者の時間と、買い取られた自分の時間とが共時化される。他者を力によって支配するのではなく、他者の時間資源を自発的に売り買いすることによって、人びとの時間を共時化することが可能となると考えたのである。結果として、貨幣と同様に、時間は共時化のメディアとなっていることを知るのである。

じつは、貨幣自体が時間で出来ているという事実がある。このことが貨幣の共時化作用をよぶことになる。お金の貸し借り、貸借関係が貸手と借手の時間を含み、将来と現在を媒介することと同様にして、貨幣自体も将来と現在の相互的な作用によって形成されている。しかも、貸借関係では「借りた金は必ず返さなければならない」という2者関係的あるいは双務的な義務感による道徳観に支配されている。ここでは、貸手と借手の2者関係が成立していることが重要なのである。したがって、人びとによる共時化作用がなければ、貨幣も存在しないといってもよいのである。

現在の貨幣は、信用貨幣と呼ばれていて、信用つまり借金によって成立している[44]。つまり、将来返済することを見込んで、現在時点で作成されたのが貨幣というものなのである。具体的にいうと、中央銀行（日銀）が国民に対する負債と引き換えに、現金の日銀券を発行して、それが市中に出回る。そして将来、これが回収されて廃棄されれば、最終的な決済で負債と資産がゼロになる[45]。資産としての交換型の共時化スタイルでは、この時間効果によって貨幣が発生するのだが、この負債に対して返済しければならないという義務感がつきまとう点からみても、2者関係的な貸借関係のもとで成立しているのが、貨幣であるということになる。

もちろん、日銀だけでなく、わたしたちも貸借関係を日常で結んでおり、過去と現在と将来とはそれぞれ異なる時間として認識されるのであるが、その一部が貨幣によって実体化されて、その実体化された部分が共時化されることはありうる。他者に「負い目」があるということは、本来全体的な責任があるということだが、その一部として返済義務の生ずるのをみることがある[46]。将来決済されるべき「負債」として現れるものが、現在の「資産」として、貨幣において共時化されているといえる。

いずれにしても重要なのは、将来と現在の時間調整の結果として、貨幣が生まれているということである。ということは、このことから、過去や将来も現在へ影響を与えており、過去や未来という時間の間にも共時化がありうるということになる。つまり、二つの共時化作用の類型が存在することになる。ひとつは他者との間に生ずる空間的な共時化であり、もう一つは過去や将来との間に生ずる時間的な共時化である。心理時間では、過去の「記憶」や将来の「期待」の影響が現在の心理的な時間に現れるといえる。また、現象学のフッサールが描いたように、内的時間では「過去把持」「将来予持」ということが現在の内的時間構成に影響を与えているといえる[47]。同様にして、貨幣においても、過去や将来の影響のもとに、わたしたちの共時化という時間構成がおこなわれていることをみることができる。

5.「時は構造なり（Time is structure)」の時間構成

問題なのは、権力による支配の社会時間でもなく、貨幣による交換の社会時間でもなく、もうひとつの人

びとの社会時間の一致を導く、潜在的な時間構成のあり方が存在するという点である。近代社会では、これまで見てきたように、権力や貨幣が時間の顕在的な構成を牽引してきたが、これと併行して、潜在的な時間のあり方が存在してきた。顕在と潜在の重層的な時間構成が見られた。むしろ社会時間特有の性質は、この三番目の在り方によるのではないかとも考えられるのである。

たとえば、人類学者エヴァンス・プリチャードは、アフリカのヌアー族を取り上げている[48]。ヌアー族には、「時間」に相当する表現方法がなかったので、計測されるような時間観念は表立っては存在しないのであるが、それにもかかわらず、牛の牧畜作業の連続において繰り返し反映される人びとの時間の関係性は認識されていたとされる。これは、牛の示す時間と、ヌアー族の人びととの間に、潜在的なものであったにしても、同時性の意識があったのだと解釈できるだろう。

ここできわめて重要な点が理解される。時間構成の構造が現れてくる。この議論を追っていくと、自分だけの「時間」というものは存在しないという時間の性質が表れてくる。機械時間、身体時間などの社会時間と異なる時間の在り方はあって、たしかにこれらはそれぞれ異なる時間を刻んでいる。けれども、この異なる時間であっても、その異なる時間の範囲内では、異なるもの同士が互いに影響し合って、時間が形成されているのである。人間や事物がそれぞれの分有する時間を過ごしているのだが、それらは自分だけ、あるいはモノだけの時間を刻んでいるのではなく、周りの環境全てとの間の相互作用を含みながら、時間が形成されていることをわたしたちは知ることになる。つまり、すべての時間構成は潜在的あるいは顕在的に「社会時間」として同時性を持っているのである。そして遂には、時間が実体化して、社会へ影響を及ぼしているのをみることになる[49]。

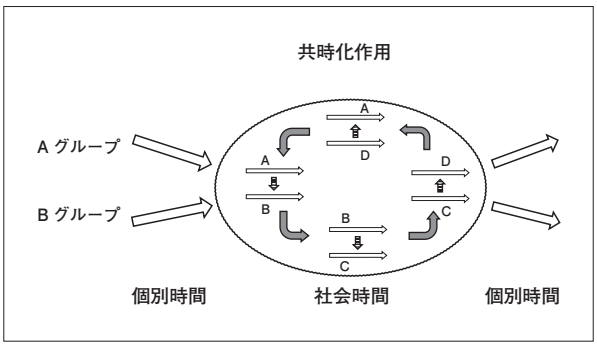

図 5　互酬型共時化作用

このような構造的な時間構成を典型的に示したのは、レヴィ＝ストロースによる一般互酬型の時間モデルである[50]。親族などのグループの間では、「女性」の交換が行われることで、種の保存が行われると考えられたのであるが、ここで時間を考える上で重要なのが、この一般互酬モデルが共時化あるいは同期モデルとして、時間へ作用を与えている点である。AグループからBグループへ、さらにBグループからCグループへ、そしてCグループからDグループへという、女性の互酬的な循環が生ずるという考えである。これは結果として、最終的には、これらのグループの間には、循環的な同期が常に生ずることが保証されることになる。この結果、グループ全体の人びとが同時性をもつことになるのだ。

もっとも、このことは絶対的な同時性を表しているわけではないという、「通時性と同時性」をめぐる古典的な時間の議論が存在する[51]。つまり、ここで注目すべき問題は、レヴィ＝ストロースのいう一般互酬型の時間（このような社会時間を人類学者ジェルに習って「構造時間（structural time）[52]」と呼ぶことにする）では、同時性という性質をもっていると、なぜ言うことができるのか、という点である。

一般互酬には、次の３通りの解釈が存在する。（１）A→B→C→D→E→F→……という一方向性の過程が進行しているにすぎない。つまりは一般互酬は通時的な時間構成を持ったものであるとする解釈がある。一般互酬モデルには、ひとつには一方向性的な運動が含まれており、この面を強調するならば、一般互酬は通時性そのものだと考えられてしまい、「構造時間」特有の性質は否定的に考えられていることになる。（２）A→B→C→……→Aという循環型の過程が見られるとする解釈が存在する。一般互酬には、一方向だけの動きに加えて、最終的にAへ戻ってくるという空間的な合致の性質が見られ、この点を強調するものである。ここでは、同時代に存在する不変的な循環が想定されることになる。これらに対して（３）上で述べたような、３者以上が関係するような全体的もしくは一般的な時間構成のタイプがある。単に通時的で一方向的な時間構成でもなく、また循環的で双務的な時間構成でもなく、構造としては共通性を持っているが、年代的には変化しつつ循環していく時間構成のあり方が存在するといえる。

以上、この議論には、いくつかの批判があるのも事実だが、最終的には「構造」的にみて、互酬型の共時化作用は、同時をもたらしていると考えることができる。つまり、このモデルが通時的な同時モデル、つまり共時型の構造時間を示しているという答えが妥当性を持っていると思われる。ジェルの言葉をそのまま引用するならば、「同時代に存在する不変の『共時』というわけではなく、構造的には同一だが、年代的には異なる通時的反復」が存在するのである[53]。イメージとしては、螺旋状の時間構成を考える人もいるし、あるいはマトリックス状の時間構成を抱く人もいる。いずれにしても、単に一者関係の一方向的な時間構成でもなく、２者間だけで完結するような対話型の構成でもなく、３者関係以上の全体的（total）もしくは一般的（general）な時間構成のタイプがあると考えられているのである[54]。

ここで問題となるのは、この「共時」という意味が拡張されているという点である。もう一度、ムーアの共時化の定義に戻ってみよう。「記号や象徴などの合図を用いて、正確な時間に限定された行為に、周辺の社会的行為を合致させる作用である」という中で、「周辺の社会的行為を合致させる」というところに注目すべきであろう[55]。「周辺」という点では、明らかに行為の「空間」的な意味における「周辺」が想定されていたと考えられる。けれども他方において、ムーアは世代などの同時代性についても言及している[56]。さらに言うならば、その後の現象学的時間論からの影響を見逃すべきではない。フッサールの「内的時間」を援用して、社会理論に取り入れたルーマンの考え方に従えば、「周辺」とは一つの行為の「環境」を意味し、この環境には「空間」的な周辺ばかりでなく、「時間」的な周辺、すなわち、現在に関わる過去や将来をも「環境」に含まれ、再帰的な時間的影響を及ぼすことになろう[57]。つまり、先述したように共時には二つの形態が存在し、「共時」という意味には、空間的な共時と、時間的な共時があり、それぞれに一つの行為に関して、環境として相互作用を及ぼしていると考えることができる。たとえば、自分が環境を予期していることと、他者が環境を予期していることには、調整が必要であり、ここには予期同士の共時化が行われていることになる。つまり、他者との間や他者間には、予期の構造時間が存在する[58]。

レヴィ＝ストロースの例は未開社会のものだが、これ以外に、近代時間のなかでの「構造時間」の具体例もみることができる。近代にあっても、祝祭（カーニバル）というものの共時的な時間効果は見逃すことができないといえる。ここには、いわゆるカーニバル効果という構造時間が現れるとジャック・アタリ、あるいは現代の批評家レベッカ・ソルニットは述べている[59]。

カーニバルで、どのような共時化が生ずるのだろうか。ソルニットは、「災害ユートピア現象」ということが災害や戦争などの危機状況で現れることを指摘している。災害ユートピアとは、災害が起きて混沌状態に人びとが陥ったときほど、人びとが助け合うような「混沌状態における秩序」が生み出される状態であると指摘している[60]。

1906年に起こったカリフォルニア大地震、ニューオーリンズのハリケーン災害、9.11テロなどの危機状況において、人びとの自発的な相互扶助の共同体が生じた。日本でも、阪神大震災や東日本大震災の際に、このような偶発的な共同体が立ち現れた。ここには、カーニバル（祝祭）でみられるような社会の時間効果が見られるといえる。

この時のカーニバルと災害はどちらも非日常的ではあるが、正反対の効果を持つもののように見える。カーニバルと災害には、いわば「時間の裂け目」を見出す効果がある。たとえば、カーニバルでは「機械時間から身体時間へ」などの時間構成を転換させる効果があるとジャック・アタリは主張した。この転換の間に「裂け目」がある。カーニバルには、日常から出て、日常の外側にある非日常時間を作り出す効果があり、その結果不特定の人びとの間に、共時化が生ずると考えられる。ここで、災害・戦争・危機などが生じる時には、不特定の人びとの間に、互いに助け合うような「災害ユートピア」が一時的に生ずる場合があるとＲ・ソルニットは述べている。カーニバルの及ぼす時間効果には、給付に対して反対給付を返さなければならないという義務感から解放されて、非因果的な「偶然の出会い」を生じさせる、いわば「混沌的秩序」が生み出されるような共時化効果がある。

このような社会時間におけるカーニバル効果の特徴はどのようなものだろうか。第１に挙げることができるのは、カーニバルの時間効果には、「不特定性」あるいは「オープン性」という特徴があるといえる[61]。共時化の相手が、必ずしも反対給付すべき特定の者に限られるわけではないという時間構成をみせるのが、カーニバル効果の特徴である。カーニバル効果を及ぼす３者関係に対して、１者関係と２者関係には、特定性とクローズド性という点で特徴があり、これがネックとなって社会に障害が出る場合が多くみられた。この反省として本来は２者関係が追究されたのだが、それが壁に当たると、さらにその反省としての３者関係が現れることになった。もっとも、この不特定性には、一般的なものから、特殊なものまで多様なタイプが存在することには注意が必要である。たとえば、互酬というメカニズムが典型例だが、給付に対する反対給付が２者に特定されないという点では、すべてに共通しているのだが、それでは３者関係に特定されるのか、それとも４者関係に特定されるのか、さらに５者関係に特定されるのか、あるいは完全に不特定となるのかについてはそのカーニバルの特性によると考えられる。

第２に、時間的にみてカーニバル効果は、潜在的な現れ方をするといえる。「潜在性」はカーニバル時間効果の有力な特徴である。つまり、いつ共時現象が現れるかについて、予め計画されたりさらに合意されたりするわけではなく、ずっと潜在的に社会時間に寄り添っていて、機会があると突然であるかのように現れるのである。たとえば、祭りの多くは暦にそれが載る前を辿ると、多くの場合に宗教上の奇跡などの偶然による場合が意外に多く、通常は日常のなかでは潜在化している。

第３に、カーニバル時間効果には、時間の「不確実性」、「偶然性」を含むという特徴がある。この点は、諸刃の剣であって、経済では将来が不確実であることから、余計な費用や手間がかかってしまうので、合理的な時間的企てができないことになる。けれども他方において、時間の不確実性があるから、将来に対して有効なリスク引き受けが可能となるのである。たとえば、ユングの指摘は心的な現象に関するものであったが、社会時間の現象としても起こることである。将来

は不確実であって、複数の事象が同時に現れ、それらは必ずしも因果的な説明ができない事象である。時間の不確実の多くでは非因果性という性質がみられるのである。カーニバル的な時間効果には、このような非合理的で、非因果的な３者関係がみられるのである。ここは注意深くみておく必要がある。それは、社会時間が合理的に説明できない部分を含んでいるということは必ずしも法則性を持たないということを言っているわけではないという点である。少なくとも、非因果的な社会時間のあり方が存在すること自体、非必然的ではあるが、ひとつの消極的な法則性を示している。

6. 結論

本稿では、社会の中における時間の現れ方に注目し、「社会時間とは何か」について追究した。そこでは、人と人、人と事物などの他者関係が反映される、集団特有の時間構成の不思議さが見られたが、重要な点は、この社会時間が人びとの同時存在、共時化作用によって成立しているという点である。

このような社会時間の構成では、誰の時間を準拠枠として定め、それに合わせるのか、どのような範囲で共時化作用が行われるのかという、他者との関係性の観点が社会時間では共通していることがわかった。とりわけ、「誰に合わせるか」の事例として「近代時間」というものを観ると、三つの時間構成スタイルのあることが判明した。

第１に、「時間構成する側」が主導してこれに時間を合わせる方式で、１者関係（支配型共時化作用）の社会時間構成があった。近代社会では、工場や企業や官僚組織などの発達によって、他者や事物を従属させる社会時間が発展した。

第２に、「時間構成される側」にも時間を合わせる相互的な方式による、２者関係（交換型共時化作用）の社会時間構成がみられた。近代社会では、市場取引や貸借関係などで、社会時間を共有することが行われるようになった。

第３に、「時間構成する側とされる側」を全体的に媒介するなかで時間合わせが行われる方式で、３者関係（互酬型共時化作用）の社会時間構成が行われる場合が見られた。祝祭や世代のなかで醸成される混沌状態のなかでの構造的時間構成が形成されるのをみた。

社会時間では、このように誰が主導するかによって、心理時間や身体時間や物理時間との調整と組み合わせが行われるかが決まってくるような、複合的な時間構成が行われている。社会時間はこれまで見てきたように「共時化作用」によって形成されるのだが、それは絶えず場面を転換し、カーニバルの時間効果のように潜在化したり顕在化したりして、実体から非実体の間で局面を変えながら、螺旋状に転回し、混沌の中にも一定の構造を構成する時間として、魅力的な時間としてあり続けている。ときには、社会時間は、精神分析のユングが言うような、時間特有の非因果的な「時間の偶然性」を秘めながら、人や事物との突然の出会いをもたらして、わたしたちを驚かせるものでもある[62]。

こうして社会時間とは、時間が建築物と環境との関係へ及ぼすのと同じような、社会全体の風化現象（weathering）なのだが、この時間の風化現象によってこそ、最終的に他者との間と他者間の複合的な時間構成を紡ぎ出す、社会というものを形成することになるのだ。時間のあり方のなかでも、内を守るだけでなく、「外気に晒して慣れさせる」つまり風化という社会時間特有のあり方が重要なのだ。そして、社会時間は風化によって次第に共時化作用が解かれていくという避け難い時間的現実をももたらすのだが、わたしたちにとってそれは受け入れ難いものではなく、むしろその不確実な立ち現れが他者との間に起こってくる僥倖として受け止め、再度共時化して、それと一緒に過ごす関係性が形成できれば良いということなのだ[63]。

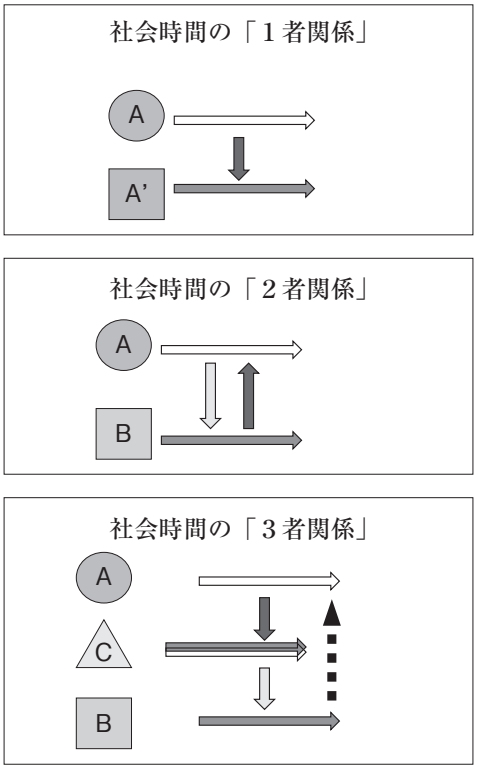

図６　社会時間にみられる１者・２者・３者関係

注と参考文献

1　Les formesélémentaires de la vie religieuse：le système totemique en Australie Émile Durkheim 1912 宗教生活の原初形態　デュルケム著；古野清人訳（岩波文庫、白（34）-214-1, 2）岩波書店、1975　p. 32

2　Sein und Zeit Martin Heidegger, 1927　存在と時間上　マルティン・ハイデッガー著；細谷貞雄訳（ちくま学芸文庫、［ハ-4-1］）筑摩書房、1994、p. 260

3　共有や分有は、物財の所有を前提とした行為であるので、時間に対してこの言葉を使うのは比喩として使わ

れていると考えられてしまうかもしれない。これに対して、「共通」の時間という認識は、共通の尺度が前提とされ、共通に時間を使う場合に成り立つものであり、何が共通の尺度となるのかが問われることになる。つまり、物的所有について考える場合に、所有権と使用権とを分離することが可能なので、「時間の共有」という意味も共通の時間を使用するという意味に使うことは可能である。さらに、後々の議論のためにも「共有」については注意が必要である。この「共有」を使用すると、空間を共有する意味に近づいてしまうが、あくまで時間の共有では、距離や所有は関係しない。遠く離れていようと、時間の共有は可能である。

4　図１は「同時的に合致する」というイメージを説明のために描いたものである。矢印で示した時間の向きはここでは左から右へ描かれているが、それは一定しているわけではない。人や物との相対的な関係にある。むしろ通常、互いに異なる方向を向いていると考えた方が妥当である。社会時間では、時間の方向や範囲は、他者や事物との相対関係によって決まってくる。

5　放送大学オンライン科目「時間を究める」第７回井出訓氏の指摘を参考にしている。

6　Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins 内的時間意識の現象学　エトムント・フッサール著；谷徹訳（ちくま学芸文庫、［フ21-5］）筑摩書房、2016、p. 109、フッサールの時間論　山口一郎著　知泉書館、2021、p. 24 Essai sur les données immédiates de la conscience Henri Bergson, 1927　時間と自由ベルグソン［著］；平井啓之訳（ベルグソン全集、１）白水社、1965、p. 49

7　The Industrial Revolution Pat Hudson 1992　産業革命パット・ハドソン著；大倉正雄訳　未來社、1999、p. 48　The great divergence：China, Europe, and the making of the modern world economy Kenneth Pomeranz 2000　大分岐：中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成　K.ポメランツ著　名古屋大学出版会、2015、p. 58

8　Family time and industrial time：the relationship between the family and work in a New England industrial community Tamara K. Hareven 1982　家族時間と産業時間　タマラ・K・ハレーブン著；正岡寛司監訳　早稲田大学出版部、1990、口絵写真参照

9　La Réolution industrielle au XVIIIe siècle：essai sur les commencemnts de la grande industrie moderne en Angleterre　Mantoux, Paul Joseph 1959　産業革命　ポール・マントゥ著；徳増栄太郎、井上幸治、遠藤輝明訳　東洋経済新報社、1964、p. 293

10　Histoires du temps Jacques Attali 1982　時間の歴史　ジャック・アタリ著；蔵持不三也訳　原書房、1986、p. 227

11　An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations by Adam Smith, 1776　国富論アダム・スミス著；杉山忠平訳（岩波文庫、白（34）-105-1-4）岩波書店、2000-2001、p. 23

12　From the American system to mass production 1800-1932：the development of manufacturing technology in the United States David A. Hounshell 1984　アメリカン・システムから大量生産へ：1800-1932　デーヴィッド・A・ハウンシェル［著］；和田一夫、金井光太朗、藤原道夫訳　名古屋大学出版会、1998、p. 312、時間意識の近代：「時は金なり」の社会史　西本郁子著　法政大学出版局、2006、p. 308

13　フランス百科全書絵引　ジャック・プルースト監修・解説　平凡社、1985、p. 476

14　Entretiens avec Claude Lévi-Strauss Georges Charbonnier 1961　レヴィ＝ストロースとの対話　ジョルジュ・シャルボニエ［著］；多田智満子訳　みすず書房、1970、p. 31, 37、Nous n'avons jamaisété modernes：essai d'anthropologie symétrique Bruno Latour, 1991　虚構の「近代」：科学人類学は警告するブルーノ・ラトゥール［著］；川村久美子訳・解題　新評論、2008、p. 77

15　Aufsätze zur Theorie sozialer Systeme Niklas Luhman（Soziologische Aufklärung / Niklas Luhmann）1970　社会システムと時間論：社会学的啓蒙　ニクラス・ルーマン著；土方昭監訳（ニクラス・ルーマン論文集、３）新泉社、1986、p. 130、社会的世界の時間構成―社会学的現象学としての社会システム論　多田光宏著　ハーベスト社、2013、p. 161

16　Durée et simultanéité：à propos de la théorie d'Einstein Henri Bergson（Bibliothèque de philosophie contemporaine）1922　持続と同時性　ベルグソン著；花田圭介、加藤精司共訳（ベルグソン全集、３）白水社、1965、p. 213、社会時間にも、マクタガート『時間の非実在性』がいう、Ａ系列の「過去・現在・未来」とＢ系列の「後と先」の、両方の「時間の流れ」が認められる。社会時間で見られる同時性をどちらかの系列で固定しても、後で見ていくように、社会時間では他系列への拡張が生ずるのをみることになる。

17　Time and power：visions of history in German politics, from the Thirty Years' War to the Third Reich Christopher Clark（Lawrence Stone lectures）2019　時間と権力：三十年戦争から第三帝国まで　クリストファー・クラーク［著］；小原淳、齋藤敬之、前川陽祐訳　みすず書房、2021、p. 16、Soziale Systeme：Grundriß einer allgemeinen Theorie Niklas Luhmann, 1984　社会システム：或る普遍的理論の要綱（グルントリス）ニクラス・ルーマン著；馬場靖雄訳　勁草書房、2020　上、p. 250

18　Essai sur les données immédiates de la conscience Henri Bergson, 1927　時間と自由　ベルグソン［著］；平井啓之訳（ベルグソン全集、１）白水社、1965、p. 109

19　Kritik der reinen Vernunft von Immanuel Kant 1781　純粋理性批判　イマヌエル・カント著；石川文康訳　筑摩書房、2014、p. 264、カントの時間論　中島義道著　講談社学術文庫、p. 127

20　Man, time and society Wilbert E. Moore 1963　時間の社会学　W.E.ムーア著；丹下隆一、長田攻一訳　新泉社、1974、p. 62

21　Zeit und Zeitlosigkeit=In time and out of time=Le temps et ses frontières Herausgeber, Adolf Portmann, Rudolf Ritsema（Eranos Jahrbuch, v. 47）1981　時の現象学　H.＝Ch.ピュエシュ、H.コルバン著；神谷幹夫訳（エラノス叢書/エラノス会議編、１、２）平凡社、1990～91　II、p. 295

22　前掲書『時間の社会学』p. 62～ p. 63

23　Durée et simultanéité：à propos de la théorie d'Einstein Henri Bergson（Bibliothèque de philosophie contemporaine）1922　持続と同時性　ベルグソン著；花田圭介、加藤精司共訳（ベルグソン全集、３）白水社、1965、p. 212、心にとって時間とは何か　青山拓

央著　講談社、2019、p. 138
24 前掲書『時間の社会学』p. 71
25 The order of time Carlo Rovelli；translated by Erica Segre and Simon Carnell 2018　時間は存在しない　カルロ・ロヴェッリ著；冨永星訳　NHK出版、2019、p. 32
26 社会的協力論：いかに近代的協力の限界を超えるか　坂井素思著　放送大学教育振興会、2020、p. 267
１者・２者・３者関係論については、奈良由美子・石丸昌彦両氏とそのゼミ生との議論を参考にしている。
27 Times of power, knowledge and critique in the work of Foucault Jürgen Portschy Time & Society 2020, Vol. 29（２）392-419　Histoires du temps Jacques Attali 1982　時間の歴史　ジャック・アタリ著；蔵持不三也訳　原書房、1986、p. 181
28 前掲書『時間の歴史』p. 137
29 前掲書『時間の歴史』P. 50
30 前掲書『時間の歴史』P. 182
31 Clocks and culture, 1300-1700 Carlo M. Cipolla, 1967 時計と文化　C.M.チポラ［著］；常石敬一訳（みすず科学ライブラリー、52）みすず書房、1977、p. 29 時計の社会史　角山榮著　吉川弘文館、2014、p. 185 時間意識の近代：「時は金なり」の社会史　西本郁子著　法政大学出版局、2006、p. 256
32 前掲書『家族時間と産業時間』p. 21
33 前掲書『時間の歴史』p. 208
34 前掲書『時間の歴史』p. 233
35 About time：a history of civilization in twelve clocks David Rooney, 2021　世界を変えた12の時計：時間と人間の１万年史　デイヴィッド・ルーニー著；東郷えりか訳　河出書房新社、2022、p. 85
36 前掲書『世界を変えた12の時計』p. 199
37 Surveiller et punir：naissance de la prison Michel Foucault（Bibliothèque des histoires), 1975　監獄の誕生：監視と処罰　ミシェル・フーコー［著］；田村俶訳　新潮社、1977、p. 158
38 前掲書『監獄の誕生』p. 190
39 前掲書『監獄の誕生』p. 231
40 Nineteen eighty-four：a novel George Orwell, 1949 1984年　ジョージ・オーウェル著；新庄哲夫訳（ハヤカワ文庫、NV8）早川書房、1972、p. 8
41 前掲書『監獄の誕生』p. 203
42 The time bind：when work becomes home and home becomes work Arlie Russell Hochschild, 1997　タイムバインド：不機嫌な家庭、居心地がよい職場　A.R.ホックシールド著；坂口緑、中野聡子、両角道代訳（ちくま学芸文庫、［ホ24-1］）筑摩書房、2022、p. 20 Time Eva Hoffmann, 2009　時間　エヴァ・ホフマン［著］；柳田利枝［ほか］共訳　みすず書房、2020、p. 126
43 Benjamin Franklin：Selections from autobiography, Poor Richard's almanac, Advice to a young tradesman, The whistle, Necessary hints to those that would be rich, Motion for prayers, Selected letters edited by Bliss Perry, 1898　若き商人への手紙　ベンジャミン・フランクリン著；ハイブロー武蔵訳・解説　総合法令出版、2004、p. 9　訳語は「である」調を採用している。
44 The Bank of England：a history Sir John Harold Clapham, 1944 v. 1　イングランド銀行：その歴史　1、J.クラパム著；英国金融史研究会訳　ダイヤモンド社、1970、p. 14
45 Debt：the first 5,000 years David Graeber, 2011　負債論：貨幣と暴力の5000年　デヴィッド・グレーバー著；高祖岩三郎、佐々木夏子訳　以文社、2016、p. 501
46 Sein und Zeit Martin Heidegger, 1927　存在と時間下　マルティン・ハイデッガー著；細谷貞雄訳（ちくま学芸文庫、［ハ-4-2］）筑摩書房、1994、p. 125
47 Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins 内的時間意識の現象学　エトムント・フッサール著；谷徹訳（ちくま学芸文庫、［フ21-5］）筑摩書房、2016、p. 110　フッサールの時間論　山口一郎著　知泉書館、2021、p. 124　力動性としての時間意識　武藤伸司著　知泉書館、2018、p. 246
48 The Nuer：a description of the modes of livelihood and political institutions of a Nilotic people E.E. Evans-Pritchard, 1940　ヌアー族：ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録　E. E.エヴァンズ＝プリチャード著；向井元子訳（平凡社ライブラリー、219）平凡社、1997、p. 162　前掲書『時間の歴史』p. 16
49 Le temps et l'autre Emmanuel Levinas, 1983　時間と他者　エマニュエル・レヴィナス［著］；原田佳彦訳（叢書・ウニベルシタス、178）法政大学出版局、1986、p. 20
50 Les structures élémentaires de la parenté Claude Lévi-Strauss（Bibliothèque de philosophie contemporaine,. Phychologie et sociologie）1949　親族の基本構造　クロード・レヴィ＝ストロース著；馬渕東一、田島節夫監訳；花崎皋平［ほか］訳　番町書房、1977-78上、p. 145　Soziale Systeme：Grundriß einer allgemeinen Theorie Niklas Luhmann, 1984　社会システム：或る普遍的理論の要綱（グルントリス）ニクラス・ルーマン著；馬場靖雄訳　勁草書房、2020下　第８章「構造と時間」p. 29
51 通時性と同時性の議論については、間々田孝夫氏との議論を参考にしている。
52 The anthropology of time：cultural constructions of temporal maps and images Alfred Gell（Explorations in anthropology）1992, p. 26
53 前掲書 "The anthropology of time", p.25
54 Essai sur le don：forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques Marcel Mauss 1924　贈与論：他二篇　マルセル・モース著；森山工訳（岩波文庫、白（34）-228-1）岩波書店、2014、p. 70　ネットワークの時間については、森岡清志氏との議論を参考にしている。
55 前掲書『時間の社会学』p. 63
56 世代と年齢集団の時間については、大久保孝治氏との議論を参考にしている。
57 Soziologische Aufklärung 2 Niklas Luhmann, 1975　社会システムと時間論：社会学的啓蒙　ニクラス・ルーマン著；土方昭監訳（ニクラス・ルーマン論文集、３）新泉社、1986、p. 108　社会的世界の時間構成―社会学的現象学としての社会システム論　多田光宏著　ハーベスト社、2013、p. 164
58 Soziale Systeme：Grundriß einer allgemeinen Theorie Niklas Luhmann, 1984　社会システム：或る普遍的理論の要綱（グルントリス）ニクラス・ルーマン著；馬場靖雄訳　勁草書房、2020　下、p. 59
59 前掲書『時間の歴史』p. 163
60 A paradise built in hell：the extraordinary communi-

ties that arise in disasters Rebecca Solnit, 2009　定本災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか　レベッカ・ソルニット著；高月園子訳（亜紀書房翻訳ノンフィクション・シリーズ、3-14）亜紀書房、2020、p. 246

61　Sein und Zeit Martin Heidegger, 1927　存在と時間上　マルティン・ハイデッガー著；細谷貞雄訳（ちくま学芸文庫、［ハ-4-1］）筑摩書房、1994、p. 278

62　The interpretation of nature and the psyche（Bollingen series, 51）1955　自然現象と心の構造：非因果的連関の原理　C. G.ユング、W.パウリ［著］；河合隼雄、村上陽一郎訳　海鳴社、1976、p. 138

63　On weathering：the life of buildings in time Mohsen Mostafavi and David Leatherbarrow, 1993　時間のなかの建築　モーセン・ムスタファヴィ、デイヴィッド・レザボロー著；黒石いずみ訳　鹿島出版会、1999、p. 12

（**付記**）この試論は、放送大学における筆者の最終講義である、オンライン科目「時間を究める」第８回の内容を大幅に書き直したものである。科目制作に参加された、主任講師である佐藤仁美（放送大学）、大橋理枝（放送大学）、岸根順一郎（放送大学）の各氏、各回担当の亀川徹（東京藝術大学）、髙松晃子（聖徳大学）、魚住孝至（放送大学）、井出訓（放送大学）の各氏に感謝申し上げる次第である（敬称略、掲載は収録順）。

（2022年10月28日受理）